

日本人英語学習者の英語リスニングにおける イギリス英語社会方言の影響

西尾有紗¹・内田翔大²

要旨

英語は国際共通語（リンガ・フランカ）として現在では世界中で使われている。このように英語が世界中で使われるようになるにつれて、国や地域ごとのバリエーションも大きくなっている。その中でも、特にイギリス英語には地域方言に加えて、RP, Estuary, Cockney などの社会方言のバリエーションも存在する。歴史的にイギリス社会では、社会方言の差は身分や出生の差として扱われ、使用する社会方言によって職業選択にも影響を及ぼしていた。このことから、教育水準の高い人や、人前に出る職業の人などは意図的に RP を話そうとする人も多く、外国から見たイギリス英語のイメージも RP がその代表であった。一方で最近では、RP の話者は減少し、Estuary を使い続ける人も増えてきている。日本人英語学習者が様々な国の英語を聞き取る際に、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語の間で聞き取りやすさに差がないことは内田 (2021) の研究などで明らかになっているが、本研究では、イギリス英語の社会方言の間でも聞き取りやすさに差がないかについてリスニング実験を行い検証した。その結果、RP と Estuary では聞き取りやすさに差がなく、Cockney のみが聞き取りにくいという結果が明らかになった。

1 背景

1-1 はじめに

英語は、5 世紀にイギリスに入ってきたゲルマン人たちが使っていたゲルマン系の言語がもとになって生まれた言語である。15 世紀に大航海時代が訪れるまでは、イギリスとその周辺地域のみで話されていた言語であった。大航海時代において、大英帝国の領土が世界中に広がっていくのに合わせて、植民地化されたり新たに開拓された土地でも英語が使

¹ 和洋女子大学人文学部国際学科英語文化コミュニケーション専攻

² 和洋女子大学国際学部英語コミュニケーション学科

われたりするようになり、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどでは英語が公用語として使われるようになった。その後、インドやフィリピンなど英語を母語としない国々でも公用語として英語が話されるようになり、英語は国際共通語(リンガ・フランカ)として現在では世界中で使われている。このように英語が世界中で使われるようになるにつれて、当然、話されている国や地域ごとのバリエーションも大きいものとなった。そのようにバリエーションの多い英語の中でも、柴田(2013)で指摘されているように、日本の学校教育ではアメリカ英語(General American Accent、一般英語)を標準として教えることが前提となっていることもあり、日本人にはアメリカ英語のほうがより馴染みがある英語といえる。一方で、もともとイギリスの植民地であった地域や地理的にイギリスに近い地域を中心にアジア諸国やヨーロッパ諸国など、イギリス英語のRP(Received Pronunciation、容認発音)を標準として教育に用いられている国や地域も多数存在する。英語学習者が英語を学習する際には、イギリス英語とアメリカ英語をはじめとした、このような英語のバリエーションにも注意を向けて学習することが重要となるといえる。

1-2 イギリス社会方言の概要

イギリス英語は他の国や地域の英語に比べて、英語の発音のバリエーションが多いと考えられる。そもそも方言には二種類あり、地域方言と社会方言がある。ウォードハウ(1994)によると、地域方言(regional dialect)とは場所によって区別される言語の変種のことであるとされる。例えば日本語における大阪弁や博多弁などがこれに当たる。一方で社会方言(social dialect)とは人々の様々な社会集団によることばのバリエーションであり、人々が所属する社会階級によって区別される言語の変種のことであるとされている。イギリスは現代でも、英語の地域方言・社会方言の両方が残っている国であり、それがイギリス英語のバリエーションの多さにつながっている。稲城他(2002)によると、現代イギリスの地域方言は、主に北部方言、中部方言、南西部方言、南東部方言の4つに分けられ、その他に民族色の強いスコットランド英語やアイルランド英語など、イギリス内のイングランド以外の国の英語のバリエーションも多いことが指摘されている。また、現代のイギリス英語には社会階級に応じたバリエーションである社会方言もあり、社会階層が最も高いRP、最も低い労働者階級のことばであるCockney、その中間にあたるEstuaryと3つに大別できるとされている。ただし、津熊(2000)によると、RPを話すとされる層は人口の3%程度しかおらず、若者層を中心にEstuaryの使用者がかなり多いとされている。また、社会的階層が高いと地域方言の差は少なく、社会階層が低くなればなるほど地域方言の差異が大きいという地域方言と社会方言の相関もあるといわれている。イギリスの3種類の社会方言の概要と言語学的特徴は、三浦(2006)、津熊(2000)、中谷(2004)によると以下の

ようにまとめられる。

1-2-1 RP

RP は Received Pronunciation の略であり、日本語では「容認発音」と呼ばれる。これは、国営放送である BBC 放送のアナウンサーの話す英語やパブリックスクールと呼ばれるイギリスの伝統的な全寮制の私立学校で話される英語である。王族が話す英語であることから「クイーンズ・イングリッシュ (Queen's English)」、「キングス・イングリッシュ (King's English)」とも呼ばれたり、教育現場でも用いられていることから「Oxford English」などと呼ばれたり、BBC で用いられることから「BBC English」と呼ばれたり様々な名称で呼ばれている。

RP の言語学的特徴としては、語末や子音前の[r]が発音されないことが挙げられる。具体的には、here, year, car, work などの/r/が発音されないので、car という単語の発音はアメリカ英語での/kɑːr/に対して、イギリス英語では /kɑː/となる。また、母音に関しても、ask や that の母音の a の音はアメリカ英語の[æ]の代わりに口やのどを大きく開けた[a:]が使われたり、not の o の音はアメリカ英語の[ɑ]の代わりに短母音の[ɒ]が使われたり、over の o の音がアメリカ英語の[ou]に対して[əu]に近い音が使われたりするなどの特徴がある。

1-2-2 Cockney

Cockney は日本語では「コックニー」と呼ばれ、ロンドンの下町のイーストエンドの労働者階級のことばとして知られている。もともとはロンドンの労働者階級の「人々」を指しており、「雄鶏の卵」(cock's egg) が由来であるが、17 世紀の初頭から一種の蔑称として「都市の貧民」やその言葉として使われるようになったとされている。17 世紀初頭の John Minsheu (Minshew)の著書で、Cockney の話者について「本当のコックニー話者というのは、ボウ教会 (Bow Church, St Mary-le-Bow) の鐘の音が聞こえる範囲で生まれ育った人たちだ」と述べられているのが有名である。

Cockney の言語学的特徴としては、語頭の[h]を落す、[θ] (th の無声音) を[f]、[ð] (th の有声音) を[v]で代用する、[r]を[w]で代用する、母音間の[t]が声門閉鎖音の[ʔ] (glottal-stop) に変化する、語末の[l]が母音化し[o]や[r]の音になる、二重母音の[ei]を [ai]と発音する、“I sings”や “you sings”のように動詞の三人称単数現在の形をどの人称にも用いるなどの特徴が挙げられる。

1-2-3 Estuary

Estuary は日本語では「河口域英語」や「エスチュアリー」と表記され、もともとはロン

ドンのテムズ川沿いとテムズ川河口沿いのエセックス州やケント州に見られた方言とされる。社会方言の RP と Cockney の中間に位置するもので、南東部方言の影響も含まれるとされている。RP にも Cockney にも属さない中間的な方言としてロンドン市民の間に広く使われている方言であり、Estuary の他にも「London English」(Wells, 1994, 1998)、「Post-Modern English」(Maidment, 1994) などと呼ばれることもある。

Estuary の言語学的特徴としては、RP と Cockney の中間的であるとされる。母音間の[t]が声門閉鎖音の[ʔ] (glottal-stop) に変化する、語末の[l]が母音化し[o]や[r]の音になるなどは Cockney と共通する特徴として挙げられている。また、Cockney とは異なり、RP のように付加疑問文を多用するなど RP に近い特徴もあるとされている。また、Estuary 特有の発音の特徴として、/n, l, s/の直後の/u/に現れる/j/が脱落しやすいというものがある。例えば Tuesday は RP では/tjú:z:zdèi/と発音されるものが、Estuary では/tjú:z:zdèi/と発音される (Cockney では/tú:z:zdèi/)、duke は RP では/dju:k/と発音されるものが、Estuary では/dju:k/と発音される (Cockney では/du:k/)。津熊 (2000) では、/j/の脱落はアメリカ英語 (General American Accent) とイギリス英語 (RP) を区別する特徴とされており、Estuary がアメリカ英語から影響を受けている可能性を示唆している。

1-3 イギリス社会と社会方言

イギリス社会の中で、歴史的に社会方言の差は身分や出生の差として扱われ、使用する社会方言によって職業選択にも影響を及ぼしていた。実際にイギリスの映画などでは、社会方言の使い分けも映画の世界観やキャラクターを決める重要な要素になっている。Lundervold (2013) による映画『Harry Potter』シリーズの各キャラクターの使用する方言の分析を参考にすると、映画『Harry Potter』の中には RP (厳密には U-RP と RP に更に分類される)・Estuary・Cockney の三つの社会方言が見受けられ、登場人物の役柄や性格によって、話す英語の社会方言を厳密に区別することで、視聴者へ与える各キャラクターの印象を作り出していることが分かる。また、イギリス社会において、その人が話す社会方言によって、周りの人から受ける印象が変わったり、職業選択の幅が変わる事は、1964年公開の映画『マイ・フェア・レディー (My Fair Lady)』で描かれている。この映画はジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw) の演劇『ピグマリオン (Pygmalion)』を原作としており、ミュージカル化、映画化がされたものである。あらすじとしては、ロンドンの街で花売りをしている生意気な娘イライザは労働者階級の特徴的な発音である Cockney を話しているが、音声学を専門とするヒギンズ教授から RP の発音強制指導を受ける。RP の話し方から礼儀作法まで徹底的に教育されたイライザはロンドン上流階級の舞踏会に参加しても違和感のないほどの変貌をとげるといえるものである。この映画を研究

した田中（2005）では、この映画で描かれているイギリス社会と社会方言のつながりについて、「是非にかかわらず、音声学者のヒギンズ教授はイギリスの階層社会の物差しとして、英語の発音が有効だと考えている。つまり、階級社会制度はあるが「美しい英語」さえ身に付ければ、下層に属するものでも、中流、上流階級へと上がっていきける可能性があることを示している」（p.50）と指摘している。このことから、イギリス社会では所属する社会階層と、使用する社会方言の相関性はとても強く、話す社会方言によって周りの人から受ける印象が変わってきたり、職業選択の幅が変わってきたりすることが読み取れる。

このように、イギリス社会特有の話す社会方言によって、周りの人が受ける印象や職業選択の幅に影響するということは、逆に印象を良く見せる必要のある政治家などは、その為に RP を話すようにすることにもつながっている。例えば、イギリスの第 71 代首相であったマーガレット・サッチャー（Margaret Thatcher）は、政治家になるために実際に Cockney から RP に話し方を変えた人物である（講談社、2015）。また近年では、サッカー選手のデイビッド・ベッカム（David Robert Joseph Beckham）も元々 Cockney を話していたが、社会的ステータスが上がるにしたがって RP に矯正したという有名人である。Dialect blog (2013) では、1994 年のインタビュー動画内でベッカムが話す際、Cockney の特徴である、“him” や “has” などの /h/ の音が 80% 近く抜けていたのに対し、最近の動画では /h/ の脱落は 20% まで減った事が指摘されている。また、“like” の語末の /k/ の音が声門閉鎖音（glottal-stop）になることや、“about” などの単語の母音が単母音（monophthong）として発音される（“abaht” のような音になる）ことは Cockney の発音の特徴であり、そのような発音が 1994 年のインタビューでは頻繁にみられていたが、アメリカ移住後の発話では、/k/ が声門閉鎖音ではなく /k/ の音として発音されるようになったり、“about” の母音音も “proud” や “around” と似たように二重母音（diphthong）で [aɪəʊnd] や [aɪəʊnd] のように発音されるようになるなど、Cockney の特徴的な発音がなくなっていることも書かれている。ベッカムのこの発音の矯正は、彼の社会的ステータスが上がるにしたがって顕著になってきたとされている。水野（2017）で指摘されているように、イギリス社会では Cockney は通じにくい英語という共通認識があり、人前に出る有名人が話す発音としては不適切であるということさえあると言われている。このようにイギリス社会では、伝統的に所属する社会階級と話す社会方言の関係性が強く、その人が話している社会方言によって周りの人から受ける印象や、職業選択の幅が変わってくるのがわかる。なので、政治家や、俳優などの人前に立つ職業に就く人は RP を身に付ける必要があったり、印象を気にして RP を身に付けようとするのが多かった。

一方で現在では、社会的ステータスが上がったからといって、人々の注目を集める職業の人が必ずしも RP に変えようとするというわけでもないようだ。実際に現在も活躍している、ジュード・ロウ（David Jude Heyworth Law）はイギリス出身の俳優であるが、Estuary

を話す代表的な俳優として知られている。また、Cockney を話している有名人としてイギリス人歌手としてはアデル (Adele Laurie Blue Adkins) が挙げられている (ブリティッシュ英語.com 2016, 2019)。また、マイケル・ケイン (Sir Michael Caine) も Cockney を話す有名人である。ケインは俳優業を行っており、演じる際にも Cockney を話している。彼が Cockney を変えない理由としてはイギリス社会的階層に反対する為に、あえて Cockney から変えていないとインタビューで語っている (The New York Times, 2009)。

これらからイギリス社会は、歴史的にみて社会方言の種類によって職業の選択や受ける印象が変わってしまう事が多かったことから、政治家や有名人など特に人前に入る職業の人達は、積極的に方言を矯正し RP を話す必要性が高く、話そうとする人が多かった。しかし、近年では時代の変化と共に、Estuary、Cockney を話す人がとても増えていることが分かる。アニメなど子供達が見る番組でも、Estuary や Cockney の使用が増えている。このことから、現時点で RP を話す人口は全体の 3%程度とされているが、更に RP を発音する次世代の子供達は少なくなっていくかもしれない。

産業革命以前のイギリスでは、上流階級にいるのは王族や、貴族であり、彼らが話す言葉は RP で、高い階級である事に直接的に繋がっていた。しかし産業革命以降では、影響力があるのが資本家や芸能人などと、上流階級と直接繋がるのが王族や貴族だけでは無くなった。現在のイギリスには新上流階級 (new upper class) というものがある。社会学の定義によると現在のイギリスの上流階級は、19 世紀の旧上流階級に、ビジネスで財を成した新しい階級が加わることによって成り立っていることから現代の新上流階級の中心はもはや貴族ではなく、資本家階級 (capitalist class) といわれている (坂田、2015)。このことから、RP を話す、話さないで生まれや育ちの差別が起こることは少なくなり、更に Estuary、Cockney が話される事が増えたと言える。しかし、現在でもイギリスの中では社会方言が根強く残っている事もあり、やはり、サッチャー首相のように政治家や、弁護士、大学教授など社会的階層が高いとされる仕事では、RP が求められる資質の一つとされている。これは、イギリス社会方言に生まれと育ちが分かりやすく出るとされていることから、RP の発音には良い環境で育ったと裏付けられる事がある。そのことから、今でも RP を話せることが「信頼出来る人物」という印象を付けやすいとされている。

1-4 本研究の目的

このように、世界中で使われている英語にはアメリカ英語、イギリス英語をはじめとして多くのバリエーションがあり、その中でもイギリス英語には RP, Estuary, Cockney という社会方言のバリエーションがある。これらの英語のバリエーションは、英語学習者にとってはどのような影響を与えるのであろうか。アメリカ英語とイギリス英語を比較すると、

両者とも同じ英語という言語の変種であるので、その文法や語彙などで大きな差があるわけではない。そう考えると、学習、習得のしやすさは、音声的な側面が大きいと考えられる。音声的な側面にはどれだけその言語の音を発音しやすいかと、どれだけ聞き取りやすいかの両者がかかわってくるが、これまでの研究で科学的手法を用いて日本人がアメリカ英語とイギリス英語のどちらが聞き取りやすいかを検証した研究としては、大木&金子 (2014) が挙げられる。この研究では、TOEIC の公式問題集から Part2 の問題を複数抜粋し、そのうちアメリカ英語とイギリス英語のナレーターの問題のみを選んで、英語の聞き取りやすさを評定してもらった調査と、3 択の選択肢から正しい返答を選ぶリスニングテストを実施した。結果、聞き取りやすさの調査に関してはアメリカ英語のほうがイギリス英語より聞き取りやすいと判断される割合が高かったが、リスニングテストの点数ではアメリカ英語とイギリス英語の間に差はみられなかった。また、内田 (2021) では、大木&金子 (2014) の実験の問題点を解消したうえで、比較対象をアメリカ英語とイギリス英語に加えて、オーストラリア英語とカナダ英語も加えてリスニングテストを行った。その結果、カナダ英語が一番日本人英語学習者の正答率が高いという結果であったが、他の 3 か国の英語には差が出なかった。

イギリス国内の英語に着目すると、実際に日本人英語学習者がテレビや映画など日常生活の中でイギリス英語を聞く機会がある場合、それは RP が多いのではないかと推測される。しかし、実際イギリスで RP を使っている人口は 3%程度とされ、地域方言を話さないイギリス人は Estuary を使っている割合が高い。また、近年では有名人でもあえて Estuary や Cockney を使い続けていることも増えていることが観察された。よって、もし日本人英語学習者が実際にイギリス人と話すとなると、聞きなれた RP ではなく Estuary を聞く可能性も高いことが考えられる。先ほどの大木&金子 (2014)、内田 (2021) の研究では、どちらもイギリス英語のナレーターとして、上流階級の発音である RP を用いて調査を行っていたが、そのほかの社会方言である Estuary や Cockney については検証されていない。よって、本研究では、イギリス英語の社会方言である RP、Estuary、Cockney の 3 方言を用いた日本人英語学習者へのリスニング実験を行い、3 方言の間に日本人にとっての聞き取りやすさの違いがあるのかを検証する。

2 実験

2-1 被験者

実験には和洋女子大学国際学部（2年生以上は人文学部国際学科）に所属する1～4年生の学生、計73名がボランティアで参加した。参加した学生は全員日本語母語話者の女性である。

2-2 実験刺激

今回の研究では、内田（2021）の実験方法を参考にして実験を行った。今回の実験に用いたテストは、『公式 TOEIC Listening & Reading トレーニング リスニング編』（Educational Testing Service, 2017）と『An Amazing Approach to the TOEIC L&R Test』（萩他、2019）から、以下の（1）のような TOEIC テストの Part 2 の問題を計 33 問抜粋し使用した。問題の形式は、短い英語の発話があり、それに対して 3 択の選択肢から最も適切な返答を選ぶ多肢選択問題である。3 択の設問もそのまま使用した。

- (1) How do I get to the home appliances section?
- (A) You can't use gift certificates at the food court.
 - (B) Yes, I'm finished with the laundry.
 - (C) The easiest way is to take the escalator by the cashier.

実際の TOEIC テストでは、問題文も（A）～（C）の選択肢も全て音声で流れるが、本実験では最初の短い発話のみが音声で流れ、（A）～（C）の選択肢は音声では流さず、解答画面に記載されているものを読んで選ぶ形式とした。問題ごとの難易度の差が結果に影響しないようにするために、3つのリストを作成した。3つのリストはそれぞれ33問の各問題を RP、Estuary、Cockney の異なるナレーターによって均等に読まれるようにし、各リストで RP、Estuary、Cockney の音声は11問ずつになるように設定した。例えば、第1問はリスト1では RP、リスト2では Estuary、リスト3では Cockney となり、第2問はリスト1では Estuary、リスト2では Cockney、リスト3では RP となるような感じである。ただし、各リストで各方言の音声は規則的な順番に出てこないよう、ランダムに順番を調整した。各被験者は一つの問題に対しては1方言の音声しか聞くことなく、3つのリストを合わせると33問全てで RP、Estuary、Cockney の3方言のデータが取れる実験デザインとした。

ナレーターによる個人差をなるべく少なくするため、TOEIC テストの公式問題集など

の音声を利用するのではなく、新たに各方言のナレーターを用意し録音を行った。各ナレーターはイギリスのナレーション会社に登録しているプロのナレーターに有償で録音を依頼した。ナレーター本人へのアンケートで、出身地や現在の居住地、言語的バックグラウンドなどの情報を聞き、本人からの申告でも、筆者による確認でも、各社会方言の話者であることが確かめられたナレーターを採用した。また、ネイティブチェックとしてイギリス人のネイティブスピーカー教員による判断も行い、確かに各社会方言の話者であることをその発音の音声的特徴から確認してもらった。また、プロのナレーターであってもナレーターごとの話し方の癖や聞き取りやすさなどの個人差は避けられないため、少しでも個人差を少なくする目的で各方言 2 名ずつのナレーターを利用した。また、男女で聞きやすさに違いが生じることも考えられたため、RP、Estuary、Cockney の 3 方言の音声は男女各 1 名ずつのナレーターを用意した。各ナレーターには実際の TOEIC テストと同じスピードで問題音声を発話するように依頼し、実際に TOEIC テストに近いスピードで録音がされていることを確認している。また、各方言 2 名のナレーターが問題文の半数ずつを担当し、ランダムに配置した。この結果、各被験者は 33 問の問題に対して 3 方言 6 人のナレーターの音声をランダムに聞く形となり、実験の意図が被験者に分かってしまうリスクは極めて低くなったと考える。音声の編集に際しては NCH Software 社の WavePad というソフトウェアを使用し、問題音声作成時に問題の説明音声や、各ナレーターの問題文の音声均一な音量となるように音声を編集している。

2-3 実験方法・手順

本実験は、Google Form を利用して行った。被験者は最初に実験の説明や個人情報の保護などに関する説明を読み、同意が得られた被験者のみ実験に参加するようにした。最初に、練習問題を含む実験の説明の文章を読み、解答の手順について理解したうえで実験を開始してもらった。33 問の実験文の音声は 1 度だけ聞いてもらい、解答を開始したら音声を停止したり、戻したりはしないで最後まで解答を続けるように複数回指示を行った。実験音声は一つの問題音声が流れるごとに次の問題音声が流れるまで 12 秒間のブランクが空いており、その間に 3 択の多肢選択問題の設定問を読んで一つに解答するように指示した。説明音声を含めた音声は 10 分程度である。被験者の募集は 2021 年度後期に和洋女子大学で行われた複数の英語系の授業内で行った。授業の内容には直接関係しないものなので、完全な任意による参加をお願いしたが、各リストへの参加者をおおむね均一にするため、募集を行った授業や学生の学年や学籍番号に応じて協力してくれる場合の参加リストを振り分けた。この結果、どのリストも同数の参加者とはならなかったが、リスト 1 には 26 名の参加者が、リスト 2 には 31 名の参加者が、リスト 3 には 20 名の参加者が集まった。

2-4 採点と分析

今回の実験では正答率によって被験者や項目のデータを除外しなかった。各被験者について、それぞれ 33 問の問題の解答を正答か不正答かの二択でコーディングした。データの分析には統計ソフトの R を用いて、一般化線形混合モデル (Generalized Linear Mixed Effect Models, GLME models) を用いて行った (Baayen et al., 2008 など)。一般化線形混合モデルのモデリングには、各問題の被験者の解答 (正答/不正答) を固定要因 (fixed effect) とし、被験者と実験刺激をランダム要因 (random effects) とした。最適モデル (The best-fit model) の選定にはバックワードセレクションアプローチ (backward stepwise selection approach) を行い、最大モデル (the maximum structure) は、ランダム要因である被験者と実験刺激の両方の固定要因への影響を加味したランダム切片と傾きを含むものとしている。この分析はいずれか条件を基準条件として定め、その基準条件と他条件との比較を行うものとなるため、今回は RP の条件を基準条件と定め分析を行った。また、一般化線形混合モデルを行った後の各方言の条件間での多重比較に関しては、R の “lsmeans” パッケージを用いて行っている (R, 2018)。

2-5 予想

第 2 章のイギリス社会の言語使用状況調査を基に本実験の結果を考えると、RP の正答率は、他の 2 つの社会方言 (Estuary と Cockney) に対して高くなるのではないかと考える。もともとイギリス英語といえは RP が連想されることも多く、TOEIC テストの音声や BBC の放送など日本人が聞く機会のあるイギリス英語の音声は RP が使用されていることが多い。また、イギリス社会は伝統的に社会方言と受ける印象の関係性が強いことから、政治家や俳優など人前に出る職業の人達も積極的に RP を使用してきた。よって、日本人英語学習者にとって最も聞き馴染みのある社会方言は RP であり、リスニングテストでも RP が最も正答率が高くなることが予想される。Estuary と Cockney について考えてみると、Cockney は最も正答率が低くなると予測される。水野 (2017) でも、Cockney について、英語学習者のみでなく、イギリス英語のネイティブスピーカーにとっても聞き取りづらい英語であることが指摘されている。よって、今回のリスニングテストでも Cockney の正答率は最も低くなることが予想される。以上をまとめると、今回のリスニングテストでは RP、Estuary、Cockney の順に正答率が低くなることが予測される。

3 結果と考察

3-1 結論

被験者 77 名の各 33 問の解答の平均正答率 (M) は 53.5% (SD=12.1, MIN=24.0%, MAX=100.0%) だった。以下の表 1、図 1 は実験音声の英語の国別の記述統計である。

	RP	Estuary	Cockney
平均 (M)	55.61%	56.91%	47.93%
標準偏差 (SD)	49.71	49.55	49.99
標準誤差 (SE)	5.67	5.65	5.70

表 1：社会方言別の正答率の記述統計 (N=77)

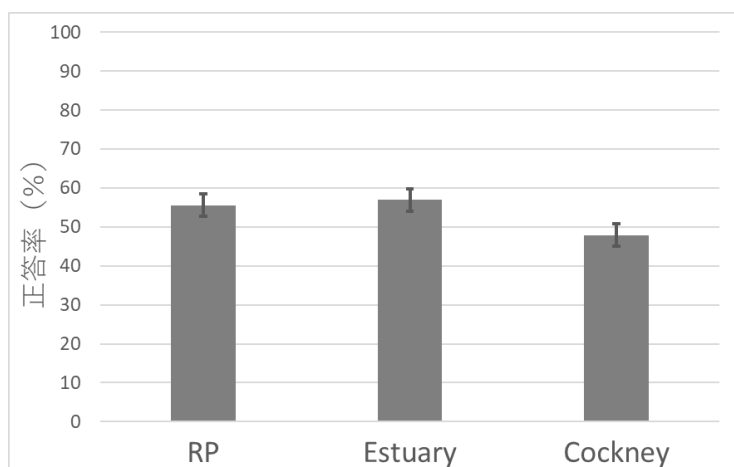


図 1：社会方言別の正答率の平均値 (M) と標準誤差 (SE) レンジバーは標準誤差 (SE) を示す

RP の条件を基準条件 (baseline) とし、各社会方言の正答率を固定要因として一般化線形混合モデルでの分析を行ったところ、RP の正答率 (55.61%) は Cockney の正答率 (47.93%) よりも有意に高かった ($z=-2.15, p=.032$)。一方で、RP の正答率と Estuary の正答率 (56.91%) の間には有意な差はなかった ($z=1.07, p=.29$)。なお、一般化線形混合モデルでの分析において、最適モデル (the best logit mixed-factors model) はバックワードセレクションアプローチを用いて選定した (Jaeger, 2008)。最適モデルは実験刺激のランダム要因の傾きのみを含み、被験者のランダム要因の傾きを含まないモデルを含まないモデルを採用した。この分析で得られた最適モデルを R の “lsmeans” パッケージを利用して多重比較を行った結

果が以下の表 2 である。

	Estuary	Cockney
RP	p=.53 z=-1.07	p=.08 z=2.15
Estuary		p=.008 z=2.99

表 2 : 社会方言別の正答率の多重比較の結果

多重比較の分析では、Estuary の正答率 (M=56.91%) は有意に Cockney の正答率 (M=47.93%) より高かった ($p<.01, z=2.99$)。また、一般下線系混合モデルの分析で有意な差の観察された RP の正答率 (M=55.61%) と Cockney の正答率 (47.93%) の間の多重比較の検定は有意傾向にとどまった ($p=.08, z=2.15$)。RP の正答率 (M=55.61%) と Estuary の正答率 (M=56.91%) の間には有意な差は見られなかった ($p=.53, z=-1.07$)。

3-2 考察

イギリス社会の言語使用状況を基に本実験の結果を考えると、RP の正答率は、他の 2 つの社会方言 (Estuary と Cockney) に対して高くなるのではないかと予想していた。実験の結果、RP の正答率 (55.61%) と Estuary の正答率 (56.91%) を比べると、数値的にも統計的にも差がないという結果であり、予想に反した結果となった。津熊 (2000) では、/n, l, s/の直後の/u/に現れる/j/が脱落するという Estuary の特徴は、アメリカ英語と共通する特徴であり、Estuary がアメリカ英語から影響を受けている可能性を示唆している。このことから、Estuary の発音は部分的にアメリカ英語に似ていて、日本人英語学習者にとって聞きやすい要素があった可能性も考えられる。日本人英語学習者にとっての RP と Estuary で聞き取りやすさに違いがなかったことは、日本人にとってイギリスで耳にする機会の多い二つの社会方言どちらも聞き取りやすさに差がないことを示しており、社会方言のバリエーションが原因でイギリス英語が聞き取りづらくなるということは考えにくい。また、RP の正答率 (55.61%)、Estuary の正答率 (56.91%) に比べて、Cockney の正答率 (47.93%) は有意に低いという結果が見られた。RP の正答率と Cockney の正答率の間の差が一般化線形混合モデルでの本分析では有意な差となったが、下位分析の多重比較では有意傾向にとどまった理由としては、多重比較の性質上の問題であると考えられる。多重比較分析では、全体の結論の有意水準が高くなってしまいうことを防ぐために、個々のペアの有意水準がより厳しく設定されるため、先の一般化線形混合モデルでの分析よりも統計値は厳しい

値となっている（林・新見、2005 など）。水野（2017）で Cockney について、英語学習者のみでなく、イギリス英語のネイティブスピーカーにとっても聞き取りづらい英語であると指摘されていることから、今回のリスニングテストでも Cockney の正答率は最も低くなることが予想されていたので、この結果はそれに合致したものだ。日本人英語学習者がイギリス人と話した際に、相手が Cockney を話す機会はそれほど多くはないと思うが、この結果から、日本人が Cockney 話者と話した際には、方言が原因で聞き取りにくさを感じることもかもしれない。

4 結論

現在、世界中の様々な国で使用されている英語は、イギリス英語やアメリカ英語など使用される国や地域によってさまざまなバリエーションがある。また、各国の英語の中にも地域による言語変種である地域方言が存在し、その発音や語彙、文法などの面でバリエーションが存在する。イギリス英語に着目してみると、このような地域による方言に加えて、所属する社会階級によって区別される言語の変種である社会方言にもバリエーションがあり、大きく分けて社会階級が高いほうから順に RP、Estuary、Cockney という3種類の方言が存在する。歴史的にイギリス社会では、社会方言の差は身分や出生の差として扱われ、使用する社会方言によって職業選択にも影響を及ぼしていた。その為、意図的に RP を話したり、他の言語変種から RP に矯正する人も多く、メディアや政治の場で使われる英語は RP が基本であった。その為、他国の人がイギリス英語に持つイメージも RP が中心であった。しかし一方で、現代のイギリスでは、時代の変化により社会方言による階級差別を否定したり、好まない、もしくは必要性を感じないなどと考える人も増えてきて、RP への印象が変わってきている。このことから、もし日本人英語学習者が実際にイギリス人と話すとなると、聞きなれた RP ではなく Estuary を聞く機会も高くなりつつある。

このように、バリエーションがとても多い英語であるが、日本人英語学習者が学習・習得する際に、言語変種によって聞き取りやすさの違いはあるのだろうか。先行研究の大木&金子（2014）では、日本人英語学習者がアメリカ英語とイギリス英語のどちらが聞きやすいかを検証するために、アメリカ英語とイギリス英語のどちらが聞き取りやすいかを評定してもらった調査と、TOEIC 問題を使った英語のリスニングテストを行った。その結果、アメリカ英語の方が聞き取りやすいと判断される割合が多かったが、リスニングテストの結果ではアメリカ英語とイギリス英語の間に差は見られなかった。また、内田（2021）では大木&金子（2014）の実験の問題点を解消したうえで、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、カナダ英語からリスニングテストを行った。

その結果、カナダ英語が一番日本人英語学習者の正答率が高かったが、イギリス英語、アメリカ英語、オーストラリア英語の間にはリスニングテストの正答率に違いは見られなかった。これらの研究では、イギリス英語としては RP を使用しており、この実験の中にイギリス英語の社会方言のバリエーションは考慮されていない。よって本研究では、イギリス英語の社会方言である RP、Estuary、Cockney の現代イギリス社会での状態を概説するとともに、3方言を用いた日本人英語学習者へのリスニングテストを行い、日本人にとってのイギリス英語の聞き取りやすさを検証した。

実験では、RP、Estuary、Cockney の3つの社会方言で二人ずつのナレーターを採用し、TOEIC テストの Part 2 の問題を計 33 問、各社会方言で録音した。三つのリストを作成し、一人の被験者が同じ英文を複数の方言で聞くことのない実験内容にし、計 77 人の被験者に対して実験を行った。その結果、正答率は RP と Estuary が Cockney に対して有意に高いという結果になった。RP と Estuary の結果には差が観察されなかった。このことから、日本人英語学習者がイギリス英語の三つの社会方言のリスニングを行う場合、RP と Estuary は同様に聞き取りやすく Cockney だけが他の二方言に比べて、聞き取りにくいという事が分かった。

Estuary が RP と同様に聞き取りやすいという結果については、津熊（2000）で指摘されているように、Estuary の発音は部分的にアメリカ英語に似ていて、日本人英語学習者にとって聞きやすい要素があった可能性も考えられる。また、Cockney については水野（2017）などで、英語学習者のみでなく、イギリス英語のネイティブスピーカーにとっても聞き取りづらい英語であると指摘されているの、今回の実験で日本人英語学習者にとっても Cockney が聞き取りづらいという結果となったことには整合性があると考えられる。現在のイギリス社会では、日本人英語学習者が聞きなれた RP ではなく Estuary を聞く機会も増えている。今回の研究から、RP と Estuary の間には聞き取りやすさの差は見られなかったので日本人英語学習者が実際にイギリス人と話す際には、相手が RP ではなく Estuary であるからと言って聞きとりづらくなるという可能性は低いと言えるだろう。しかし、Cockney だった場合は社会方言が原因で聞き取りづらくなるという可能性が示めされた。

今回の結果を内田（2021）の結果と合わせて考えてみると、内田（2021）の研究ではイギリス英語として RP の発音を使用し、アメリカ英語、オーストラリア英語と聞き取りやすさに差がないという結果であった。今回の研究では RP と Estuary との間に差がなかったことから、イギリス英語の社会方言の二つである RP と Estuary は、同様にアメリカ英語とオーストラリア英語と聞き取りやすさに違いがないことが言える。一方で Cockney は、これらの言語変種に比べて聞き取りにくいという事が分かった。

元々日本人がイギリス英語を学ぶ上で最も頻繁に耳にするのは RP が主流であり、

TOEIC テストの音声や BBC の放送など、イギリス英語といえば RP のイメージが強かった。しかし言語調査から、最近では Estuary を使用する有名人も増えてきており、これに伴い日本人が Estuary の発音を聞く機会も増えてきていることが明らかになった。リスニング実験でも日本人英語学習者にとって RP と Estuary の聞き取りやすさに差がないことから、イギリス英語を学ぶ際には、RP の発音がイギリス英語の代表例だと考え、学びがちであるが、Estuary の発音にも意識を向け、Estuary の発音を身に付けるということも候補に入れて考えてもよいかもしれない。

参考文献

- ウォードハウ, ロナルド、田部滋 (監訳)、本名信行 (監訳) (1994). 『社会言語学入門 (上)』. 東京:リーベル出版
- 内田翔大 (2021). 「日本人英語学習者の英語リスニングにおけるイギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語・カナダ英語の発音のバリエーションによる影響」, 『和洋女子大学 英文学会誌』 (56), 1-12
- 稲城昭子、堀田知子、沖田知子 (2002). 『新えいご・エイゴ・英語学』. 東京:松柏社
- 大木俊英 & 金子夏実 (2014). 「日本人学習者によるイギリス英語とアメリカ英語のリスニング」. 『白鷗大学教育学部論集』, 8 (1), 115-130
- 講談社 (2015). 『発音ひとつで扱われ方が変わる!? イギリス社会で信用を得やすい「オックスブリッジ・アクセント」とは』, <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/42837?page=2> (閲覧日: 2021 年 12 月 7 日)
- 坂田薫子 (2015). 「ハリー・ポッターのイギリス (2) — 『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」, 『英米文学研究』 (50), 日本女子大学英語英文学会, 71-89
- 柴田知薫子 (2013). 「イギリス英語の現状と英語教育の方向性」, 『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』 (62), 97-103
- 田中美和子 (2005). 「音声学資料としての映画-- 『マイ・フェア・レディ』 (1964) に見るコックニー方言 Cockney in My Fair Lady(1964)」. 『国際研究論叢』 19(1), 大阪国際大学, 39-53
- 津熊良政 (2000). 「Estuary English」, 『立命館言語文化研究』. 立命館大学国際言語文化研究, 12(1), 141-154
- 中谷美佐 (2004). 『ナマった英語のリスニング』. 東京:ジャパンタイムズ
- 萩寛美、エレノア・スミス、福井美奈子、中井達也、倉田誠 (2019). 『An Amazing Approach to the TOEIC L&R Test』. 東京:成美堂
- 林智幸・新見直子 (2005). 「厳格化の観点からの多重比較法の整理」, 『広島大学大学院教育研究科紀要』 (54), 広島大学, 189-196
- ブリティッシュ英語.com (2016). 「イギリス人歌手のアデルはイギリス英語で歌っているのでしょうか? アデルの発音の特徴」, https://britisheigo.com/british_word/3356.htm (閲覧日: 2021 年 12 月 15 日)
- ブリティッシュ英語.com (2019). 「ジュード・ロウの英語のアクセント・発音を徹底分析」, https://britisheigo.com/british_word/8994.html (閲覧日: 2021 年 12 月 15 日)
- 三浦弘 (2006). 「変容する現代英語—河口域英語」, 『ことばの普遍と変容』 (1). 専修大学言語・文化研究センター, 175-178
- 水野稚 (2017). 「「Hello」の発音ひとつで人の見る目が変わる 一目おかれる「教養ある英語」を話すコツ」, 『東洋経済 ONLINE (2017 年 4 月 4 日)』, <https://toyokeizai.net/articles/-/165382?page=2> (閲覧日: 2021 年 12 月 12 日)

- Baayen, R. H., Davidson, D. J., & Bates, D. M. (2008). Mixed-effects modeling with crossed random effects for subjects and items. *Journal of memory and language*, 59(4), 390-412
- Educational Testing Service. (2017). 『公式 TOEIC Listening & Reading トレーニング リスニング編』. 東京:国際ビジネスコミュニケーション協会・TOEIC 運営委員会
- Dialect blog (2013). David Beckham's "Poshification", Retrieved on 10th December, 2021, from <http://dialectblog.com/2013/05/02/david-beckhams-poshification/>
- Jaeger, T. F. (2008). Categorical data analysis: away from ANOVAs (transformation or not) and towards logit mixed models. *Journal of Memory and Language*, 59, 434-446
- Lundervold, L. (2013). Harry Potter and the different accents. A sociolinguistic study of language attitudes in Harry (Master's thesis, The University of Bergen)
- Maidment, J. A. (1994). Estuary English: hybrid or hype?. In *4th New Zealand Conference on Language & Society*, Lincoln University, Christchurch, New Zealand
- The New York Times (2009). Michael Caine: An Accent That Broke Class Barriers from <https://youtu.be/XBjp1oEZcwU>
- R (2018). Package 'lsmeans'. Retrieved 2nd February 2021, from <https://cran.r-project.org/web/packages/lsmeans/lsmeans.pdf>
- Wells, J. C. (1994). Transcribing Estuary English: A discussion document. *Speech Hearing and Language: UCL Work in Progress*, 8, 259-267
- Wells, J. C. (1997). What is Estuary English?, *English Teaching Professional*, 3, 46-47. Retrieved on 19th December, 2021, from <http://www.phon.ucl.ac.uk/home/estuary/estuary.pdf>